



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-6-?



『癒えない傷跡』

(発掘整理中)

霧樹里守 is 土岐真扉

『 (ネーム ・ 1) 』 (@中2?)

『 (ネーム ・ 1) 』 (@中2?)

2007年1月19日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

(※無地の大学ノートの一部にコマ割りがいて番号ふって、
番号順にセリフを別書き※)

ケイ サキ 何読んでるの？

サキ うん!? 万葉集だよ ケイ

ケイ そんな昔の本 よく あきないわね

サキ 凡人には良さがわからないんだよ

ケイ あーっ!! それどういう意味!?

サキ 別に

ケイ フンだ 自分はどうなのよ
化学音痴のくせに!

エリー お茶いかが？ お二人さん

サキ あ、サンキュー エリー♪

レイ サキ!! (※テレパシー)

サキ なに？ レイ

レイ ソレル女史はどこにいる!?
危険がせまっているよ

サキ 女史は今 首都惑星 (リスタルラーナ) に降りてる.....

たしかか!?

レイ あたしの予知能力は絶対さ!!
女史の車が爆発するよ
.....3.....2.....1..... ほら! 今だ!!

ケイ キャアアアア

レイ ソレル女史!!

女史 あ..... あ..... ただいま
MD-F3地点で爆.....
手..... 火傷した.....

レイ 女史!!
サキ、ソレル女史を医務室につれてくから.....

サキ わかった、あとはまかせといて

レイ 悪い

サキ いってこと、一番、ソレル女史を心配してるのは
あなたなんだから.....

レイ じゃ.....

ケイ だいじょうぶかしら、ソレル女史.....

エリー ん..... まあレイがついていれば
多少のケガは治せるから.....

サキ MD-F3ね..... フム.....

エリー ちょっとサキ
どこへ行く気なの!?

サキ 決まってるだろ、MD-F3まで

調査に行くんだよ

エリー 待ってよ！ わたしも行くわ

サキ 一人でだいじょうぶさ

ケイ 危険よ!!

サキ 平気！

エリー あん もう!! ひとが地上まで移動できないのを知っていておいていくんだから.....

ケイ 空間対話は直後にやる方が効果があるもの

エリー ま、ね。
でも.....

ケイ ん？

エリー こんな時 わたしたちって本当に何もできないのね.....

ケイ ええ.....

←サキの瞳はこんな感じ。吊り上がっていて、切れ長で、黒目が大きい。

と、やはり高校時代の宙着がついた、サキの片目のアップのイラスト付き☆

(※このネームを、無地の大学ノートにシャーペンと色鉛筆で描きお越した「漫画」(シャーペンで主線を入れたのは私、色鉛筆で「塗り絵」をしたのは、中学校時代の(なぜか「演劇部」の後輩連中☆)も、現存するのですが、皆さまにお見せできないのが残念です..... (w)

2007年1月21日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

エリー おかえり サキ 何かわかった？

サキ うん…… ソレル女史は？

ケイ レイが医務室へつれていったわ

サキ ああ、じゃ そっちで話そう

エリー なんで？ ここでいいじゃないの

サキ チビどもに聞かれたくないんだ

ケイ ……何か重大なことなのね

エリー いいわ、行きましょ

サキ レイ、ソレル女史は？

レイ ……………

サキ それじゃ本題に入ろう

サキ まず 女史の車は外部からの攻撃を受けていない つまり
内部に小型の爆だんがしかけてあったんだ

レイ ……時限爆だんか？

サキ いや、女史は今日 私用で でかけたんだから
いつどこを通るか わからなかったはずだ
たぶんリモートコントロールだろう

ケイ　でも女史の車はバリアがはってあるから
コントロール波は通さないはずよ

サキ　ふつうの電波や何かならね

レイ　！　はん人は超能力者なのか？

サキ　たぶん……ね

エリー　超能力者が　はん人だとしたら
いったい　いつ　爆だんを　しかけたのかしら

ケイ　え？

エリー　女史は外に出たときは必ず車にバリアを
はるでしょう？　だから車に爆だんを仕掛け
るとしたら　この　かくのう庫（ガレージ）に入る以外
手がないはずだわ

ケイ　じゃあ　このエスパッション号の中に裏切り者が
いるの!?

サキ　そいつは考えなかったな

サキ　ケイ　今日リスタルラーナにおりた人間を
調べてくれないか

ケイ　OK！

ケイ　あら、今日、船から出たのはソレル女史だけよ、
大気圏内までテレポートできるのはサキとレイだけだし……

レイ　じゃ、犯人は一人じゃないんだな……

[『 漫画のネーム☆ \(3-1\) 』 \(@中学2年!! 何故か演劇部の部活中に描いていた.....はず☆\) A^-^;\)”。](#)

2007年5月25日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(1\)](#)

(1頁目)

——宇宙紀元17年2月——

(エスパッション号の居間にて)

ケイ「サキ、何読んでるの？」

サキ「ん？ ああ、万葉集だよケイ」

ケイ「また二千年も前の本読んでるのオ！？」「よくあきないね」

サキ「よさがわからない方がどうかしてるんだよ」(ため息)

ケイ「まるでわたしがバカみたいに聞こえるわね」

サキ「事実でしょー」

ケイ「自分はどうなのよ科学おんち！！」

サキ (ゾクッ) <科学と聞いただけで鳥はだのたつ人

エリー (クスクス笑いながら)「お茶いかが？ お二人さん」(ふわんっとティーカップ2つ乗せたお盆が宙を飛ぶ)

サキ「サンキュー、エリー♪」(フライング・カップ飛んでくる)

レイ『サキ！！』(※心話)

(2頁目)

サキ『何！？ レイ』(紅茶を飲みながら)

レイ『ソレル女史はどこにいる！？』『危険がせまってるよ』

サキ『！ 女史は今、リスタルラーナに……』 『……たしかか！？』

レイ『あたしの予知能力は絶対さ！ 女史の車が爆発するよ』 『……3・2・1、今だ爆発！！』

ケイ「キャアア」

サキ「 ！ 」

ピ カ ッ

(室内に閃光が閃き、人影が現れる)

(3頁目)

サキ「ソレル女史！！」

ソレル (ふら……としている) 「あ……あ……サキ」

ソレル「MD-F3地点で爆発……」 (ぐらっと倒れ込む女史)

サキ「……！」 「女史！」 (かけよって抱きとめる)

ソレル「……だいじょうぶ、単に超能力を使いすぎただけだから……」 (ハアハア) 「部屋へ……」

レイ「部屋へつれてくから——」 「あとはたのむ」

サキ「わかった」

(レポートで消えるレイと女史)

(サキ、顎に手を当て、おもむろにすくと立ち上がる)

サキ「さて、MD-F3、ね」 「フム」

エリー「ちょっとサキ!! どこへ行く気！？」

サキ「MD-F3だよ」

エリー「待って一人じゃ危険よ」

サキ「.....」

(4頁目、コマ割りだけしてあって、未完☆)

コメント



りす

2007年5月25日1:09

あっ！ 今、カウントが「7999」です！

(ってことは、コレ書き込むと「8000」?)

.....自分で踏んじゃって、どーする.....☆ (-_-;)>"

『 漫画のネーム☆ (3-2) 』 (@中学2年!! 何故か演劇部の部活中に描いていた.....はず☆) A^-^;)”。

2007年5月26日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

(1頁目)

『 愛 と 復 讐 の 傷 跡 』

(☆高笑いする女性のアップと涙ぐむ少女のアップの間で、
フラッシュ集中しているサキ全身の図☆)

(2頁目)

宇宙紀元17年——

(※エスパッション号内、居間。三々五々と遊ぶ子供たちであふれかえる部屋の隅っこのソファで、一人読書にふけるサキの遠景。)

(※無地の大学ノートにコマ割りして、自分で製図用インクでGペン入れて、墨汁でベタ塗った上から、何故か演劇部の同輩・後輩連中が、色鉛筆で「カラー原稿」にしちゃったページ.....☆

(^◇^;)”

「インテリア色指定：柳沢」とか欄外に書いてある☆)

ケイ「サキ、何読んでるの!？」

サキ「ん? ああ、万葉集だよ~☆」

ケイ「二千年も前の本!」「それ、そんなにおもしろい?」(引く。)

サキ「これの良さがわからない方がどうかしてるんだよ」

ケイ「あらまアえらそーに」「なんなら化学(バケガク)の面白さでも説明しましょうか」

サキ「ギクッっっ」

(ケイがにやっと笑いながら『高等化学入門』なるタイトルの本を差し出し.....というか突き付け.....、サキが「ゾ~~~~」となって両手でストップかけながら後じさるコマ)

(3頁目)

(※「色指定：リサ」と書いてある☆)

エリー（きゃらきゃらと笑いながらシュッとテレポートして現れ）「よくやるわねエおふたりさん」「お茶を入れたのだけど……いかが？」（手にした盆の上でソーサー付きのティーカップが2つ、宙に泳いでいる）

ケイ「わ♪ ありがとう」

サキ「サンキュー、エリー♪」

(お茶に口をつけるサキの後ろアタマに、レイのテレパシーのイメージ出現)

レイ『サキ！！』

サキ『何！？ レイ』

レイ『ソレル女史はどこにいる？ 危険がせまっているよ！！』

(サキ、部屋の向こうからテレパシー飛ばしてるレイの方を振り向く)

(レイ、向こうでワケわりげに肯いて見せる)

サキ『……ソレル女史のロケット・カーは今、リスタルラーナ星の磁極付近を走ってるよ』『…
…確かか！？』

レイ『あたしの予知能力は絶対さ』『女史のロケットカーが爆発するよ……』『ホラ、今だ！！』

(ピカッと室内の反対側が光り、サキ、驚いて振り向く。)

サキ「！？」

(4頁目)

レイ（ギョッ！！としながら）「ソレル女史！！」

女史（シュウッと煙をひきずりつつテレポートで出現しながら）「ア……ハ…… ただいま。
MD-F3地点で爆発してね……」「腕……火傷した……」

(サキ、青くなってソファから立ち上がる)

女史「あ……痛（つ）ッ」（叫んでのけぞる）

（※「色指定：ヤココ」と書いてある）

レイ「女史！！」（シュッとテレポートして女史の側に出る）（女史、倒れ込みつつ安堵の溜息）

レイ「サキ、ソレル女史を医務室につれてくから」

サキ「わかった、あとはまかせておいて」

レイ「……いいか？」「悪い」

（シュッとテレポートで女史を連れて消えるレイ）

ケイ「ソレル女史、だいじょうぶかしら……」

エリー「え、え、まあ、レイがいっしょなら——……でもよく助かったわね……」（エリー、蒼白）

（5頁目）

サキ「さて……」 「MD-F3地点ね……」 「フム」

（顎に手をあてながら、すくと立ち上がる）

（※「色ぬり：リサ」）

エリー「ちょっとサキ！！ どこへ行く気なの！？」

サキ「MD-F3だよ」「調査してくる」

エリー「お待ちなさいよ、わたしも行くわ！！」

サキ（軽く笑って）「わたし一人でだいじょうぶさ」

ケイ「危険よ」

サキ「平気 平気」

エリー「お待ちなさいったら、こら！！」

サキ「アハッ」（笑いながら逃げる）

（「注：エリーの手」と書いてある、怒りに震える手）（無視して投げキスしながらテレポートしてスッと消えるサキ）

サキ「バイバ〜〜イ♪」

エリー「サキ！！」

(6頁目)

ケイ「あーあ、また一人で行っちゃって……」「まあサキならだいじょうぶだろうとは思うけどね」「なんでいつも一人で行きたがるのかしら？」

エリー（独白）『——なぜ——』

『なぜ、わたしたちの手をこばむの?!』『わたし知っているのよサキ、あなたが本当は孤独（ひとり）なのだってこと』『なぜわたしあちを受け入れてくれないの?』

(場面転換を表す空白)

サキ（レポートして目的地にカッコ良く降り立ちながら／独白）（※「色ぬり、リサ」）『ごめんねエリー、心配かけて』『でも、わたしには人の好意を受ける資格なんかないんだ』『だから——』

(ヒョオオオオ……と風の吹き抜ける岩石砂漠に降り立ったサキ遠景)

(場面転換を表す空白)

(これ以降、枠線のみペン入れしてあり、あとはシャーペン描き。)

(※明かりを落とした怪しげな通信室にて)

リライア「フッフ、計算どうりサキがMD-F3に行ったわよ」「……ワナにはまりにね」

オーダ「OKリライア、これからの手はずを覚えていて!？」

リライア「もちろんよ」

リライア「——まずサキをおびきだした所で8人のA級能力者が待ち伏せていて生け捕りにする」「次にわたしがわざとつかまってサキに対する人質になる」「——で、サキをおとりにレイをおびきだし、エリー、ケイと、じゅんぐりにソレル女史の配下にいる超能力者を全部捕まえ」「邪魔者がいなくなったところで計画実行!!」「でしよう?!」

オーダ「そのとおりのよ」

(7頁目)

リライア「だけど姉（ねえ）さま、ソレル女史はどうするの?！」

オーダ「ん……そうね、本当に困った事になったわね」

オーダ「まさかあの爆発で助かるとは思わなかったものだから、他の方法は考えていないのよ」
「これからは警戒も厳しくなるでしょうし……」 「暗殺はまず不可能ねエ」

リライア「そんな!! 女史がいたら、すぐにみつかってしまうわ!!」

オーダ「……待って、今いい手を思いついたわ」 (ニヤリとして) 「ソレル女史が回復するまでどのくらい掛かる?」

リライア「……そうね、起きられるようになるまで……3日くらいかかると思うけど」 「本当にだいじょうぶ?」 (青ざめている)

オーダ「もちろんよ、ソレル女史をひきはなせればいいのでしょうか?」 (クッククックと笑う)
「かわいい妹をあぶない目にあわせたりしないから安心なさい」

オーダ「だいいち、今あなたがつかまってしまったら私の計画がダメになってしまうわ」 「そんなことはぜったいにさせない。……たとえ何が犠牲になっても……」

オーダ (アップで) 『世界をわが手に』
『今こそやつらに復讐する時よ!!』

『 漫画のネーム☆ (3-3) 』 (@中学2年!! 何故か演劇部の部活中に描いていた.....はず☆) A^-^;)”。

2007年5月27日 連載 (2周目・地球統一～ESPA) コメント (1)

(8頁目)

(場面転換と時間経過を表す空白ゴマ2つ)

(ヒョオオオオオ.....と風が吹く) (後ろ向きに立っているサキ)

サキ (独白) 『外部から攻撃された形跡なし、——かといって爆弾が仕掛けられるわけがない——』 『いったいだれが、どうやって車を爆破したんだろう』

サキ 『まさか超能力者じゃ——』 (ハッと気づく) 『だれがいる！！』

サキ 『——後ろの岩影だ。ひとり、ふたり、.....全部で8人?』 『なにものだ? いや、それより——』

(バツと閃光はしる)

サキ 「うわっ！」 (ビツと銃光がかすめる)

サキ 「つ！！」 (かすった二の腕の傷口がズキッと痛む)

(9頁目)

サキ 「くっ」 (シュウウウウン、と超能力で自己治癒する音)

(この後2コマで傷が治癒する様子)

ゼヌ (シュッとレポートで現れる) 「さすがだな地球人、ボスの見込みはたしかなようだ」 「だが防御 (ガード) があますぎるのは超能力者として最大の欠点だぜ」

サキ 「超能力者 (ゼネッタ) か! ? (※)」

ゼヌ 「そうだ」 「オレはゼヌ、うしろはオレの部下だ」

(複数人影がシュッシュとテレポートで現れる)

(欄外に「※ ジースト人の超能力者のこと」と書いてある)

(10頁目)

サキ『——全員A級らしいな——』

「ではゼヌ、わたしに何の用だ！」

「ソレル女史の車を攻撃したのもおまえたちか!？」

ピノ (ホホ……と高笑いしながら) 「攻撃!? あれは時限爆弾よ! 知らないでしょう、ボスの妹がスパイに……」

ゼヌ「よせピノ!! 不用意にボスのことをしゃべるな!!」

サキ『スパイ!!』 『だれか仲間に裏切りものがあるのか!？』

ピノ「あら、いいじゃない隊長、どうせすぐに仲間になるんだもの……」

サキ「仲間!？」

ピノ「ええそう、わたしはピノ・マーグレイ、よろしくね」

(シュッとテレポートで親しげに近寄って来る)

ピノ「あなたが思った通りに強い能力を持っているのでうれしいわ」

ピノ「有能な部員がふえるのは「計画」のためにとってもいいことですもの」「あなたただっておろかな普通人(ジュアリー)には、あきあきしているのでしょうか? 協力してくれるわね!？」 (手を差し出す)

(11頁目)

サキ「……おろかな……普通人(ジュアリー)……!？」 (怒りの表情)

ゼヌ「そうだと!!」「ただの人間に何の生存価値がある!？」「もともとジーストを支配していたのはオレたちなんだぞ!! 二千年も前からだ!!」

ゼヌ「それを二〇〇年前に身の程知らずの普通人(ジュアリー)どもが革命を起こしたんだ」「今じゃB級以上の能力者(ゼネッタ)には公式の生存権すらない。発見されれば即銃殺だ」「C・D級のやつらだって、たんに労働力にされているにすぎないんだ」

ゼヌ「おまえたちの所はどうだ！？」「地球やリスタルラーナは変異的能力者（ミュータント・エスパー）を力ある者としてうやまっているか？」「冗談じゃない、その存在すらも社会的には認めていないじゃないか、化け物扱いして、果ては精神病院か人体実験だ」

ゼヌ「考えてもみろ、なんの力も持たない下等な人間たちに、よりすぐれた新人類であるわれわれが奴隷扱いされてるなんて、バカバカしいとは思わないか」「オレたちがあいつらを奴隷にするか、さもなくば、皆殺しにするべきなんだ」

（以上、3段ブチ抜き大ゴマでの大演説☆）

（12頁目）

ゼヌ「今こそ全世界を、われわれの支配下に——」

（サキ、ゾ……クッ、とする）

ゼヌ「さあどうだ、サキ・ラン。ここまで話したんだ、むろん仲間に入るだろうな」「もっとも、抵抗したら、ちからづくでもつれてこいってのがボスの命令だがね……、どうする？」

サキ「だれが！！ ごめんだ！！」（バッ！と拒否のポーズで身構える）「なんでそんな………開放軍の連中が聞いたら、なんて言うか……！！」

ゼヌ「開放軍？ ……フン。超能力者（ゼネッタ）開放軍か。普通人（ジュアリー）も超能力者（ゼネッタ）も同じ人間だなんて主張してるやつらに、なにができるものか……」
「それよりも、もう一度、よく考えてみるんだな」「われわれに協力しろ」

サキ「NO！！」「超能力者（わたしたち）だって同じ人間なんだ！！ 新人類なんかじゃない！！」

（13頁目）

ピノ「わからない人ねエ、偽善家ぶることないじゃない」（あきれて両手をあげる）「そんなにバカだとは思わなかった」

ゼヌ「ああおしいな」「こうなったらちからづくで……」

サキ「やれるものならやってみろ！！」（カチッと銃のスイッチを入れながら、ダッと前のめり

に走り出す)

(バツと斜めにジャンプしながら銃発射。)

(※デッサン変です……☆(^◇^;)☆……)

ゼヌ (サキの銃が腹部にドスッと命中して) 「ウッ」

ゼヌ「……いい腕だなサキ、だが」 (ニヤリと笑う) 「われわれに衝撃銃 (ショックガン) は通用しない。われわれの戦い方は……」

サキ「！」 (ストツと着地しながら) 『あれだけのエネルギーをくらっても平気なのか?! 普通なら気絶するか、悪くても……』

ゼヌ「やれ！」 (左手を高く挙げる。ザッザッと背後に展開する部下たち)

(14頁目)

(居並ぶゼネットタ達の目がチカッチカッと光る)

サキ「ウッ！」 (肩をすくめ、顔をしかめる)

サキ『体が動かない!?!』『——精神 (サイコ) バリヤーだ!!』

ゼヌ「ハッハ!! どうだ動けまいサキ。A級6人分のエネルギーがかかっているんだ」「いかにおまえの力 (エネルギー) が強くても、6人相手ではかなわないぞ」

(15頁目)

サキ『なんて力 (エネルギー) だ!! こっちで壁 (バリヤー) をはっても、この分じゃ、1分と持つかどうか……』 (左腕を背後にギリッとひねられて呻く) 「うっ!!」

サキ『どうすればいい——』

サキ『レイを呼ぼうか、二人ならなんとかなるかもしれない——』『でもそれじゃレイまで危険な目にあわせてしまう——』

サキ『だめだ、わたしのせいで人が死ぬところなんて二度と見たくない！！』『そのくらいなら、つかまった方がマシだ！！』

サキ『つかまった方が、ま……し……』（フラッと気絶しかかってよろめく）『——フォーラ……』

（16頁目）

ゼヌ（テレパシーで）「おとなしく降参しろ！！」

サキ『、少し楽になった——？』

ゼヌ「われわれはおまえに危害を加えるつもりはない」「《計画》に協力するとちかえ！！　そうすれば……」

ピノ「さからってもむだよ！」「どのみち脳波コントロールで理用できるんだから……」

サキ『脳波コントロール！！』（ハッと正気づく）『——そうだ、もしつかまったら——』

サキ『降参する気はさらさらないけど、わたしを捕まえさえすれば、やつら、わたしの力をいいようにつかえるんだ』『——そんなことになったら多勢の人が死ぬ！！』『それにレイやエリーまで、手が出せなくなるんだ、彼女らにわたしが殺せるわけないもの……』

サキ『……………』

（後ろ手に縛り上げられた恰好で立ちつくすサキの周囲をヒョオオオオ……と風が吹く。）

（17頁目）

サキ「——そんなこと、させるもんか！！」

（いきなり戒めをバツと払いのけてしまうサキ）

ゼヌ・ピノ「うっ！？」

（18頁目）

ピノ「.....信じられないわ..... あれだけのエネルギーをくらっただけで、まだ動けるなんて.....」（集団でバリアーを張って対抗するにもかかわらず、壁に圧がかかってバチッバチッと火花が散っている）（ゾッとするゼネラー同）

ピノ「あなた.....いったい何物なの!？」

サキ「ごくふつうの人間さ、単に超能力を使えるだけのね」「新人類なんかじゃない!!」（銃を構えてスック.....と立ち上がる）

サキ「どうやらあなたたちのスパイは、あまり有能じゃないらしいわね」「おおかた、わたしのことをちょっと力（エネルギー）が強いA級能力者だと言ったんでしょう」

サキ「あいにくとAはAでもスペシャルAでね」「神経がたかぶったり驚いたりすると、力（エネルギー）が無敵大に近くなるんだ」

サキ「だから.....」（うつむく）

サキ「.....」

『——じまんできたものじゃないな..... そのせいで フォーラが死んだんだから..... 』

（19頁目）

サキ「今なら6人相手でも互角に戦える.....」「どうする、あきらめて帰るかい？」

ゼヌ「バカにするな!!」「できるというなら見せてもらおう!!」

（未完☆）

コメント



りす

2007年5月27日2:09

ええとだから.....

中学生ですってば、このネーム書いたの..... A^-^ ;) ”

青クサイといおうか、あいかわらずと言おうか、
しかしやっぱり、中学2年でここまでシソー的に
カタマッテ（偏って？）いるのって、どーよ自分？

.....という感じで.....
.....A^-^ ;)”

そして言うまでもなく、もちろん、この設定は、
『スケバン刑事』と『超人ロック』と、
萩尾望都の火星シリーズ（タイトルど忘れ☆）の、
影響受けまくっているだけだというのは.....

言うまでもありません☆ (^◇^);(-_-);>”(^^);(^_^);”

2007年5月13日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(1\)](#)

エスパッションシリーズ Part 1.

癒えない傷跡第二稿.....

宙暦17年。リスタルラーナ上空40万km。——ここまで上って来てしまうと最早“上空”等とは言い難い。

大小2つの月すら足下をはるか横切って行くのである。

そんな高所からの惑星のながめは、なかなか素晴らしいものだった。

サキは今、ふと思いついた自室の大掃除が面倒になって、途中で逃げだして来て一服しているところである。と、言ってもロビーは子供達の遊び場をも兼ねているから、そのにぎやかな事と言ったらないのだが、本に頭を占領されているサキにとっては、まあ、存在しないも同然である。

そんな様子の彼女を見て、

「何、読んでるの？」と、前を通りかかった少女が例の調子でちょっかいをかけて来た。

「ん？ ああ.....万葉集だよ、ケイ。」

字義通り没頭していたサキは、半ば呆けたような表情で顔を上げながら相手に書名をさし示した。

「またァ？」 ケイが愛らしい群青色の瞳をあげて、あきれた声をたてる。

「たっぷり20世紀は前の本なんでしょう?! それ、そんなに面白い？」と言うのだ。

実際には25世紀近く昔に書かれたものらしいね、とサキが答える。

「これの良さが解らない方がどうかしてるのさ」 そう言って本を閉じると、

「あら、まあ、偉そーに.....」とケイが反撃する。「なんなら化(バケ)学の面白さでも説明しましょうか?」「ヒエッ!」

つまるところは、本と言えは少女小説しか読まないケイと、化学と聞くと回れ右して逃げ出すサキとの、いつもの通りのかけあい万才なのである。

そこへ、

「良くやること、ね、おふたりさん」とばかりに、世紀の金髪美人(ブロンドグラマー)エリザヴェッタ・アリスが割り込んで来た。「お茶を入れたのだけれど.....いかがかしら?」

「わっ♪」すぐにケイが手をたたいて喜ぶ。

「サンキュー、エリー!」サキも笑って手を伸した。「お茶」と言うよりもお茶菓子の手造

リケーキの方へである。

3人がジョークの2つ3つ飛ばしながらお茶に口をつけた時だった。壁の向うの廊下の辺りからレイがテレパシーでサキに話しかけて来た。

(サキ!!)

気づいて、サキの飲みかけた茶碗の動きが止まった。(何!? レイ)

(未完)。

コメント



りす

2007年5月15日0:33

☆ 万葉集 ☆ (^◇^;)

なんで中坊のくせに無理してコレ読んでハマったかと言うと、山田ミネコ御大のハルマゲドンシリーズ(初期)の影響なのは見え見えのバレバレの明々白々なのである..... (^◇^;) ”

『自我系の暗黒巡る銀河の魚』だったかな? 『～少女』かな?

2007年2月3日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

エスパッションスクール自習室風景——映写室から高学年組が騒ぎながら出てきたところで、リアその他が待ちうけていてエスパッションに関して質問。

リア・オーダを率先して追ったのは、自分の立場が危うくなっているミュタントエスパーだった。

『癒えない傷跡』 設定資料 Ⅰ

時期.....宙暦17年（リスタルラーナ暦2661年8～9月ごろ）

舞台.....主としてエスパッション号内（リスタルラーナ上空にて）

形式.....普通の小説形態。サスペンス、もしくはミステリー。

心理描写は終盤に持ち込むまで極力抑えること。

行動のみにて表現。

舞台背景.....帝国社会とゼネッタについて。

エスパッション組織の概略。

挿話.....リアとオーダの生い立ち、2年前のサキとオーダの会見。

荒筋第一稿

・1人で出かけたソレル女史が狙撃されてテレポートして帰って来る。すっとなで行ったサキが待ち伏せを受けて捕まりそうになり、一合戦やらかしてスパイの情報を得て帰ってくる。で、首脳会談。エスパッション全体が不安に騒ぐ。

そんな中でエスパッションの中でもあいついで2件の殺人が起こり、外ではQQQの調査にサキたちが奔走する。ある時リアに不信を抱いてつけていったサキはオーダを見つけ、リアの生いたちと重ねてその事を誰にも言えず悩む。

リアがQQQへ戻った後、凶悪な計画をかぎつけたサキは一人で前後の見境もなく乗り込んで行き、そこでリアが死ぬ。

サキが殺したと思い込んだオーダに追いつめられたサキは反撃できずに殺されそうになり、土壇場でレイがオーダを射殺する。

第二稿

・ 自習室風景に始まってホールでサキは新入生（ニュー員ロール）相手に雑談していた。そこへ一週間ばかり選挙運動もしくは政権争いで飛びまわっていた女史と、その護衛役のレイ初め数人がどやどやと戻って来、レイはすぐ用があると言って帝国へ。他の連中が自習室へ引きあげてから女史がまた出かけようとするので今度はサキが随行を申し出るが、私用だし誰も知らない約束だからと断ってソレル女史独りで出る。サキ一抔の不安。

・ 数十分後に画像抜きで遠距離音声通信がサキ宛に入る。サキ青ざめた顔をして「ソレル女史が捕まった、行って来る」。場所はどこと聞かれて答えられないサキにエリーが言ったところでわかるわけがないというと、ホールの中のだれかがスパイだという。サキが出かけるのを見届けた少女（もしかしたらリア役は少年）の謎の通信。

・ 指定の場所へ着いたサキは、ソレル女史が単にエサにされたに過ぎず、本命は自分だったと知り、わけが解らずとまどう。拉致されそうになって無我夢中に争い、気がついたらテレポートして安全圏までのがれていた。で、理解できないまま、帰る。

第三稿——エピローグ……オーダとティルの逃亡。

第1章《エスパッション》

舞台・時代背景の説明と人物紹介。

サキが本の説明——ととして《エスパッション》の概略。

女史一行が帰ってきて、解散。

第2章《ゼネッタ》

一休みしてレイ、ソレル女史でかける。徹夜した感じのサキが朝起きの連中とコーヒーなど飲み始めた頃に音声通信が入り、サキすっとなでゆく。ちゃんちゃんばらばら。

第3章《Q.Q.Q.》

レイの話。

第四稿——

第一章はエピローグとこみで、《エスパッション》の詳細には言及しない方が、2話・3話とつなげる時の効果がおもしろい。ついでならESPAってこともふせとく。

“幕間”は消して、少なくとも前半はサキのみ中心で進めて行く事。

第二章《ゼネッタとESPA》では、大体サキの超能力についての説明は終え、ゼネッタとESPAの現・実情について議論……と言うか会話形式を主体に進めて行く。ピノは消してゼヌ対サキ。

~~——第四章あたりで《エスパッション》に停電おこして、分解炉の申からアルジス、ゼラエ両名の遺留品。五章か六章でソレル女史のエア・ジェットに爆薬を仕掛けて来たと報告している“少女”をリュラ——~~

第四章あたりでアルジスとゼラエの死体（エア・ロック）が発見され、

五章か六章でソレル女史のエア・ジェットに爆薬を仕掛けたと報告している“少女”をリュティンが発見。ダスターシュートに詰め込まれる。その後“リア”がリュティンは家へ帰ったと報告する。

『 (リライア・ティル) 』 (@中2)

『 (リライア・ティル) 』 (@中2)

2007年1月31日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

ぞっとするほどに美しい
ととのった冷たい横顔

次のしゅん間それは
氷解し
無じゃきで愛くるしい
笑顔があった

見まちがいだろうか？
いや
そんなはずはない。

心臓を摘みとってしまうような

ほほえみの中からただよってくる冷気を感じずにはいられなかった。

リライア・ティル

髪 うすい紫
両耳、切りとられている。

首すじに手形のアザあり。

「笑うと

えくぼがでるんだね。

かわいいよ」

「人間なんて信じない！」

64ページ

起

- ・ソレル女史と長官
- ・ソレル女史がおそわれる
- ・エスパッション号での会話
- ・殺人現場

承

- ・事件発生
- ・調査
- ・リアの失そう
- ・追跡
- ・地下組織にて
- ・再会

リスタルラーナ人

髪の色、雑多

目 ほぼ地球と同じ

耳 とんがってる

ジースト人

髪の色、雑多

目 紫、金色、赤、オレンジ

耳 ほそ長い

『 (オーダ・ティル・プラウディ) 』 (@中2)

『 (オーダ・ティル・プラウディ) 』 (@中2)

2007年1月29日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

オーダ・ティル・プラウディ伯爵令嬢 (ジースト人)

髪 赤かっ色

眼 赤かっ色

ひたいとうで、胸の中央にキズあり。

「帰ってソレル女史に伝えなさい。

正義や平和に興味のない人間も

いるんだとネ！」

(※幼い頃、ゼネッタ暴動に巻き込まれたことで負った
一生消えない火傷のキズにより、ゼネッタ絶滅を図る
過激急進派の最先鋒となる。)

題名 復讐・超少女 (仮題)

『 (設定ノートの断片というか、上半分★) 』 (中学?年3月末頃)

2007年2月21日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

話 (ストーリー) の進行として、カットバックにした方が、
主題がぼやけなくていいのではないかな。

題名 復讐・超少女 (仮題)

枚数 600枚前後

第一章 事件の発端

- ・ ソレル女史、狙撃される。
- ・

3/31

.....なぜか、ここでマップタツに切れてます.....(^^;)

リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-6-?
『癒えない傷跡』

<http://p.booklog.jp/book/112798>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112798>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト